

# 図画工作科

大 峯 誠  
谷 本 克 典

## 1 めざす子どもの姿

### (1) 造形とのかかわりと図画工作科

私たちが生活する様々な場において、身のまわりにある造形（形と色で構成されるすべてのもの）と私たちは、密接な関係があるといえる。デザイナーやアーティストといった限定された人たちのみが造形と密接な関係をもっているのではない。日々の生活の中で私たちは、町中の緑に心奪われたり、今日着る洋服の色を選んだりしている。つまり、目の前の造形からよさや美しさを感じたり、よさや美しさを感じる色や形でものを選んだり組み合わせたりと、考え、表現（作品だけでなく行為も含める）しているのである。このように無意識のうちに常に造形に働きかけられ、働きかける関係の中で、私たちは生活し成長し続けている。この双方向の関係を私たちは“造形とのかかわり”ととらえることとした。

生涯にわたって連続するこのような造形とのかかわりをよりよいものにするために、図画工作科は、子どもたち一人一人が自ら“感じ、考え、表現する”ことを通して造形とのかかわりをより豊かにしていく教科であると考えている。

### (2) 図画工作科の本質と基礎・基本

造形とのかかわりは、何に、そしてどのようによさや美しさを感じるかという価値観と、自らの価値観に合うものをいかにつくっていくか考え、表現するという創造性に支えられている。より豊かな造形とのかかわりをつくり出すためには、価値観が広がり創造性が培われることが不可欠となる。

そこで、私たちは、図画工作科の本質を「造形に対する価値観を広げ 創造性を培うこと」ととらえた。

人は、造形に対し自らの感覚を働かせ、よさや美しさという造形的な価値を見出していく。それは、既存の価値観がもととなり「ああいう美しさの感じ方もあるのだ」という他のいろいろな価値観と出会うことで広がっていく。どのようなものによさや美しさを感じるか、見出していかかという価値観を受け入れる入口が広がれば広いほど、新たな価値との出会いがある。広がった価値観でまた新しい価値観と出会うこの繰り返しの中で、造形に対する価値観がさらに広がっていくと考えている。

しかし、価値観がどれだけ広がっても、その

価値観に合う表現への具現化ができなければ、造形との豊かなかかわりは生まれてこない。自らの価値観をもとに“自分にとって新しいものをつくらうとする意欲”“その意欲を支える技能”“技能を身につけようとする意欲”といった創造性を駆使して造形との新しい関係をつくらうとすることも、造形とのかかわりをより豊かにするために欠かせないものとなる。

また、こうした造形とのかかわりの中で、「造形の世界はいいなあ」という（自分にとって）美的なものを愛好する思いや身のまわりの造形にかかわり続けようとする思いも生まれてくるであろう。

これらが本質に迫るために大切にしたい連続した学びの姿である。そこで、私たちは、図画工作科における基礎・基本を「様々なよさや美しさを味わうことができること」「自分の思いに合わせて表現の仕方を考えたり 材料や用具を扱ったりできること」とした。

### (3) めざす子どもの姿

図画工作科における本質である「造形に対する価値観を広げ 創造性を培うこと」は、造形に対する生涯にわたる個の主体的で連続した営みである。その営みの一過程として図画工作科の授業をとらえ、次のような子どもの姿をめざすこととした。

造形との新しいかかわりを  
つくっていかうとする姿

造形とのかかわりの中で一人一人の子どもの個性が発揮される。その過程で、価値観が広がり、創造性が培われていく。そして、一人一人にとって新しい造形とのかかわりがつくられていく。

つまり、私たちがめざすものは、いかによいものをよく、美しいものを美しくつくりあげることではなく、一人一人が自らの価値観をもち、それに見合う表現への具現化へと進んでいく過程で、新しく豊かな造形とのかかわりをつくりあげることである。さらに、多くの造形とのかかわりに出会い、それらが融合していくことで、さらに新しく豊かな造形とのかかわりが生まれていくことが期待できよう。

この造形との新しいかかわりをつくっていかうとする姿は、「ひと・もの・こと」との新しい

いかかわりをつくっていかうとする姿のあらわれであり、生涯にわたり学び続ける人への育ちに、そして、「ひと・もの・こと」とのよりよいかかわりを大切にしようとする人への育ちにつながっていくであろう。

## 2 めざす子どもの姿に迫るために

### (1) 一人一人の表現への働きかけを促す

子どもの表現は、さわってみたい、かえてみたい、つくってみたいという思い（表現への欲求）に支えられている。その思いを大切に、高めていくことが一人一人の新しい表現への働きかけをつくっていくことになる。新しい表現は、新しい造形とのかかわりをつくっていくための大きな原動力ともなる。これまでにある造形とのかかわりに加え、新しい価値観との出会いがあり、材料からある程度の抵抗感があり、用具の使い方のさらなる工夫などがあってこそ作りあげることができる題材の配置を考えていくことが一人一人の表現への働きかけに必要であると考えられる。

また、新たな題材に出会ったときにそのもののよさや美しさ、行為そのものの楽しさや行為の結果生まれるよさ、美しさが十分に感じられるようにすることが大切である。そのために感じたことを話し合ったり、自分だったらこうしたなど、自分なりの造形とのかかわりを表出し合ったりする場を設けていく。そのことで、価値観が広がり、表現の多様性を楽しみ、表現する楽しさが実感できるであろう。そして、さらに表現への欲求が高まり、自分ならば、何をどのようにするか探求する活動が始まっていくであろう。

さらに、題材への働きかけに必要なであれば、材料や用具の扱い方を子どもたちの目前で実際に行っていく。それらを理解し、活動の見通しを持つことで、表現への自信につながるだけでなく、表現活動の意欲をさらに高めていくことになると考えている。

### (2) 一人一人の自分らしさの現れを促す

表現の自分らしさは、一人一人の価値観や創造性の現れである。その現れは、主題であったり、表し方であったり、行為であったり様々である。子どもと共に教師もそれぞれの“自分らしさ”に共感できるようにし、より積極的に表現に取り組めるよう留意したい。

そこで、一人一人の思いや意図を把握し、それぞれの“自分らしさ”がより広い場で認められるよう機会をとらえ、全体の場に広げていく。また、それぞれの“自分らしさ”を比較し

たり、これまでの自分と今の自分を比べたりしていく場を設定し、自分らしさの中に見えるよさや美しさ、つくり方など新たな造形とのかかわりへつなげる視点をもてるようにしていく。

さらに教師だけが一方的に用具・材料・資料・方策の提供をするのではなく、子ども相互でもそれらを提供し合える場や集団が生まれるよう留意していく。“自分らしさ”を追求する中で、共に“自分らしさ”を求めていく仲間の思いも大切にすることを育んでいきたい。

### (3) 価値の共有化を図り

#### 価値観の広がりを促す

表現活動は、部分的な単純作業に陥りやすい。そこで、自分らしい表現に向けた新しい課題を見つけることができるように表現活動の過程で、自分の表現を見つめ直す場を設ける。最初に発想し構想してきたことと比べてどうなのか、部分だけではなく全体としてみた場合どうなのかなど、一人一人がその後の表現活動の新たな指針となるものをもてるようにしていく。

また、友だちの表現からも自分の表現にはないよさや美しさといった価値に気づくことができるよう相互鑑賞の場も適宜設ける。

これらの活動から得た今後の指針となるものや気づきを相互に伝え合ったり、全体の場に広めたりする場を設ける。そして、造形的な価値の共有化を図り、それぞれの価値観の広がりを促していきたいと考えている。

### (4) 自己評価活動によって

#### 自分らしい表現のよさや

#### 自身の変容の自覚を促す

自分らしい表現を追求していく（してきた）姿をふり返り、見つめ直すことで自己の学びに納得できるように自己評価活動を取り入れていく。

その方法は、表現の過程の節々で、“感じ、考え、表現したことを交流したり、メモに残したりしていくこと”“完成した段階で自分の思いやつくり方で努力してきたこと、伝えたいメッセージをふり返ってまとめていくこと”などである。こうした活動を通して、表現の過程の中に点在する自分らしい表現のよさを見つけ、どのように造形との新しいかかわりをつくってきたか明確にしていきたい。

こうした活動は、学びの成就感や自分の表現を大切にすることをいっそう高め、自分らしい表現をした喜びと新たな自分との出会いへとつながっていくと考える。そして、新たな造形とのかかわりをつくっていかうとする意欲も喚起できると考えている。

### 3 実践例 — 3年 —

#### (1) 題材名 つけたシタワー（心を伝える）

- (2) 目標
- ・話し合ったことや粘土の感触から思いを広げて、楽しくどこから見ても格好のよい形を表現する楽しさを味わうことができる。
  - ・粘土の特徴を生かしながら、部分を丁寧に形よくつくったり、しっかりとつなげたり、全体として安定のある形づくりができる。

#### (3) 指導にあたって

##### 本題材におけるめざす子どもの姿について

本題材は、粘土でつくった土台に粘土の小片をつけ足していくということをくり返す。粘土のかたまりを上や横の方向に延ばしていきながら立体として「どこから見ても美しい」形を表したり、土粘土という新たな材料の特徴を感じ取る学習である。

子どもたちは、これまでに油粘土による粘土遊びの経験や2年生題材「いっしょにあそんでくれる ゆめのどうぶつ」の学習を経てきている。油粘土は軽量かつ接合も容易で形態も安定している。本題材における土粘土（人造）は、油粘土に比べて質感も異なり、重く接合も丁寧に圧着することが必要であり、時間とともに硬化してくる。また、2年生ぐらいまでは自分の思ったことをストレートに楽しんでつくっていたものが、3年生ぐらいになると作品のでき具合を人と比べ始めて、自分の作品が思うようにいかないと表現が消極的になったりする子も出てくる。一様に抵抗感を覚えるであろう土粘土をつみ取ってくり返し積み重ねていく操作を主とする活動の中で粘土の新たな特性やつくり方で表現を楽しんでくれることを願っている。

本題材を通し、土粘土の抵抗感を新たな粘土の特性としてとらえ直し、これまでとは違うつくり方で新たな自分の表現をし、喜ぶことができる子どもの姿をめざしていきたい。

したがって、その姿に迫るための基礎・基本は、次の2点となる。「感じる」面に関しては、どこから見ても「楽しく格好のよい」立体としての形づくりを楽しむことができることである。「考え、つくる」面に関しては、材料とかかわりその特性や感触から、発想を広げて自分の表したい感じになるように形づくることである。

##### めざす子どもの姿に迫るために

##### ① 一人一人の粘土でつくることへのはたらきかけを促す

題材名からつくるもののイメージを広げ、思いついたことを話し合う中で、活動の見通しを持つてるようにしたい。油粘土でつくってきたことについて想起させた後、土粘土に触れ、感触や重みなどから油粘土との違いを話し合わせ土粘土でつくることへの興味を喚起したい。

##### ② 一人一人の自分らしさの現れを促す

子どもたちそれぞれが土台となる一塊りから粘土に小片を積み重ねてできる形から表したいものを思いついたり、できあがってきた形から何か別のものの形を見取ったりすることに共感していきたい。“自分らしさ”を追求する中で生まれた発見や悩みを全体の場に広げることで、互いの“自分らしさ”を認め合い尊重していけるようにしていく。

##### ③ 粘土の扱い方やつくり方の共有化を図り自分なりの表現の広がりを促す

つくる手を止め自分の表現をじっくり見つめ直す場を設け、問題点から新たな課題を見つけ、より“自分らしい”表現に進展できるよう全体の場に広げる。また、相互鑑賞では、表現やつくり方の違いから楽しさや格好よさを見出し、その後の自分の表現に生かしていけるようにしたい。また、「うまくつかない」「重みで倒れそうになる」などの問題点も全体の課題としてとらえ、みんなで方策を出し合ったりする。場合によっては、「どべ」を使っての接合や支え棒を使うなどの方策を教師が提供することも考えておく。

##### ④ 自分らしい表現のよさや自身の変容の自覚を促す

自分が初めに構想したことや材料に対して感じたことと、つくり終えて自分や友だちの作品から感じ取ったことやつくり方のことではがんだり工夫してきたことをメモや作品カードに残し

ていく。このことで、今の高まった自分のよさや前とは違った自分の存在を意識したり、友だちそれぞれにも尊重すべきよさがあることを知り、今後の新たな“自分らしさ”の追求への意欲づけにつなげていきたいと考えている。

### 学習計画（総時数 3 時間）

主な活動と内容	めざす子どもの姿に迫るために	評価ポイント
<p>1 学習の見通しをもつ</p> <p>○題材名「つけたしタワー」から発想した自分のイメージについて話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京タワー、エッフェル塔…</li> <li>・でも、なにをつけ足していくのかな？</li> </ul> <p>○材料の土粘土について話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・しめっていて、ザラザラするよ</li> <li>・ずっしりと重い感じがするなあ</li> <li>・べとべととして手が汚れちゃった</li> </ul> <p>粘土を少しずつつけ足しながら 楽しくどこから見ても格好のよいタワーをつくらう</p>	①	<p>題材名から自分の表してみたいイメージを発想している</p> <p>土粘土の特徴について気づいている</p>
<p>○「どこから見ても」について話し合う</p> <p>2 製作する</p> <p>○土台になる形をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おにぎりみたいになつたぞ</li> <li>・土台だからぐらぐらしないようにつくらう</li> </ul> <p>○つけたしてつくる方法を知りつくり始める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どんどん高くしていこう</li> <li>・横につなげていってもおもしろいぞ</li> </ul> <p>○相互鑑賞し 感じたことや分かったことを話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・○○さんのタワーは高いのにしっかりと立っていてすごいな</li> <li>・○○さんの部品の粘土は一つ一つ形が変えてあって工夫があるな</li> </ul> <p>○製作上の問題点について 解決策を考える</p> <p>「部品がすぐとれてしまうんだ」→どべを使って接着しよう 「ぐらぐらして今にも倒れそう」→割り箸で支えたらどうかな</p>	②③④	<p>楽しく格好のよいタワーをめざして意欲的につくっている</p> <p>つけ足していく操作から自分の形のよさや工夫を見つけさらに発想を広げている</p> <p>部分を丁寧に形よくつくっている</p> <p>全体に安定があり丈夫な粘土の付け方ができている</p>
<p>3 作品カードをそえて展示し 表現のよさや違いを鑑賞する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・乾いた粘土はすっかり硬くなってしまって触った感じも全然違うぞ</li> <li>・○○さんの作品名は作品にぴったりマッチしているな</li> <li>・みんなの作品が集まると不思議の国ができたみたいだ</li> </ul>	①④	<p>それぞれの主題を視点を互いの作品を見合い、よさや美しさを味わっている</p>

#### (4) 本題材における授業の実際と考察

本題材におけるめざす子どもの姿は「粘土の特性をつかみ、これまでとは違うつくり方で新たな自分の表現をし、喜ぶことができる」姿である。上の学習計画の中の評価ポイントをもとに、実際の授業の流れに沿って、それぞれの手立てが、めざす子どもの姿に迫るために有効な手立てであったかどうか、授業記録や子どもの「学習カード」の記述などともに考察していきたい。

##### ① 題材名や材料をもとにつくるもののイメージの発想を促す

題材名から自分の表してみたいイメージを発想している

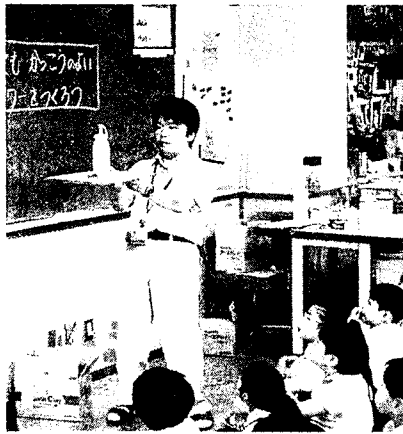
##### 授業の実際（1/3）

- 1 話し合い活動を通して学習の見通しを持つ
- 「タワー」って知ってる？
  - ・東京タワー とんがった形
  - ・とても高い 展望台がある
  - ・三角形で 倒れにくい
  - 土粘土でつくるけど 油粘土とどう違うな？
  - ・重い ・色が違う ・固まってしまう
- 「どこから見ても  
楽しくかつこうのよいタワーをつくらう」
- 「どこから見ても」ってどういうことかな？
  - ・いろんなところから見ても
  - ・正麗が決まっていない

子どもが題材名「つけたしタワー」を知るのは、この授業が始まってからである。事前の準備として子どもは、タオルを持ってくるといふことしか伝えられていない。

子どもの身近なところにはタワーはなく、東京タワーのように実際にタワーを見たことがある子は少ない。東京タワーやエッフェル塔などの資料写真を見せたり、アイディアスケッチをさせたりすることも考えたが、題材名をもとに話し合いを進める中で子どもそれぞれのイメージを持たせることとした。この話し合い活動の中で、言葉だけでなく、黒板にタワーの形を図示する子もいた。タワーを見たことがある子も、そうではない子もそれぞれに「タワー」づくりへのイメージをつかんでい

- さあ どこからつくろうか
- ・土台 しっかりつくらないと倒れてしまう
- 土台に使う分の粘土を切り分けるところから始めよう



「どこから見ても」って  
 ということだろう

土粘土の特徴に気づいている

子どもがこれまで慣れ親しんできた油粘土と本題材で扱う土粘土とは異なる性質がいくつかある。授業研究の段階では、土粘土と油粘土との違いを話し合わせることも考えたが、製作を進めていく中で実際に土粘土の特徴を感じ取らせていくこととした。ここでは、袋に入ったままの土粘土を手にした最初の印象を述べるだけで、製作のための時間の確保を優先した。ひとつだけ、油粘土と違って完成後は固まってしまいやり直しはきかないことだけを確認した。

翌週の鑑賞会では、油粘土と比較して硬化後の作品を前にして、製作の様子をふり返って粘土の扱いについて話し合ったり、出来上がった作品の様子について感想を述べ合ったりした。どの子も一様に重さや湿り気、製作途中におけるひび割れなどを「困ったこと」としてあげていたが、硬化した自分の作品を手にして「ずっしりとしていい感じ」「色が変わっていておもしろい」「本物の彫刻みたいでかっこいい」などと活動の成就感を得られることができていたようである。

製作から乾燥後の鑑賞会までの一連の学習を終えた段階で子どもはいくつかの土粘土の特徴をつかむことができたと考えている。

② 自分らしさの現れを促す

授業の実際 (1/3)

- 2 製作する
- もとの粘土から土台とする分を切り分ける
  - 土台となる形をつくる
    - ・思ったより固い粘土だな
    - ・どんな形の土台にしようかな
    - ・なかなか難しいぞ
  - つけたしてつくる方法を知る
    - ・残りの粘土をいっぺんにつけるとすぐ倒れてしまいそう

たようである。題材名の“つけたし”の部分については、土台ができた段階で話し合うこととし、ここではあえて触れなかった。

製作の見通しとして、「どこから見てもかっこうのいいタワー」をつくることと土台づくりから始めることを知らせた。「どこから見ても」は、立体造形の学習を進めていく上で今後もキーワードとなる言葉である。子どもに投げかけたところ、「いろんなどころから見てもということ」「正面がきまっていな」などの反応があった。粘土板ごと作品を回して、見たりつくったりすることと時おり離れたところから見ることによって部分だけでなく全体の様子も確かめるように話した。

子どもは、製作に入る前の段階で「どんなタワーにしようかな」「土粘土って油粘土とだいぶ違うのかな。早く触ってみたいな」と意欲を膨らませていた。話し合いが終わるといつも以上に素早く準備にとりかかり製作に入ってしまった。この様子からも子どもそれぞれに表してみたいイメージがある程度発想できていたのではないかと推察できる。



土粘土 持ってみてどんな感じかな



まずは土台の分を切り分けるところから

楽しく格好のよいタワーをめざして  
 意欲的につくっている

土台となる粘土の分量やその成形に戸惑ったり、悩んだりしながら子どもは製作活動に入ってしまった。土台をタワーの一部と解釈して脚づくりをする子もあれば、地盤と考えて平たい土台をつくる子もいた。

なかなか土台の形が決まらない子、できた土台の上にタワーをつくり始める子が出てきたので、一度つくる手を止めさせて話し合いの場をもった。

- 少しずつ粘土をつけ足しながらつくるう指やへらでしっかりとおさえてつけようへらで模様をかくやりかたもあるよ
- 指でつまんでもいいけど、粘土ベラを使うのもいいよ
- 今日の自分の「めあて」をしっかりとってつくりましょう（表1）

土台については、形はいろいろあってもよいが大切なのは「ぐらぐらしないこと」「くずれないようにすること」をこの話し合いを通して確認できた。

タワーの形をつくっていくことについては、土台以外の粘土の重さを実感させて「少しずつ少量の粘土をつけ足しながらつくっていく」ことを話した。少しずつつけ足していけば急にバランスを失うこともないし、限られた粘土の量でも形や飾りを楽しみながらつくることができからである。合わせて粘土ベラの使い方についても知らせた。

完成させるまでの見通しがついたところで、学習カードに“今日がんばること（めあて）”を書かせた。

子どもの“めあて（表1）”から見て取れることは「じょうぶにつくること」をめあてとした子が約3分の1、「かっこよくつくること」をめあてとした子も約3分の1、これらを複合したものとなった子が残りの約3分の1である。授業の冒頭で話し合ったことが素直に反映されたものになっている。後述の子どもふりかえり（表5）からも子どもが意欲的に製作に取り組んでいたと考える。

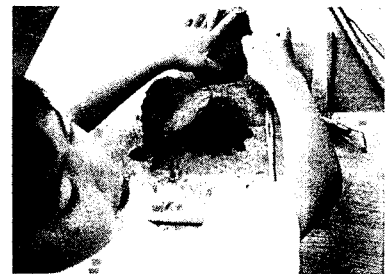
代表的なめあて	人数 ●=1人	近似的なめあて
土台をしっかりくずれないようにする	●●●●●●●●●● 11人	下の足がくずれないように じょうぶでたおれないように こわれないように
どこから見てもかっこよく	●●●●●●●●●● 12人	上から見てもななめから見ても 完全オリジナルをめざす
じょうぶでかっこいいのを作る	●●●●●●●● 8人	くずれずきれい かっこよくてふんばる
大きく長くなるように	● 1人	

表1 子どもの今日がんばること（めあて） 3年2組 32名

つけ足していく操作から自分の形のよさや工夫を見つけ さらに発想を広げている

とにかく高く高くしていこうと決めてつくっている子、タワーの脚を動物の脚のようにアレンジを加える子、ハートや星形の粘土の小片をいくつもつくり土台やタワーの本体に貼り付けていく子、それぞれに意欲的に製作に取り組んでいた。粘土を小さくつまみとりながらつけたしてつくる操作をくり返していくことにより、予想もしない形が現れてきたり、完成形を意識しないで楽しく製作することができたと考える。

しかし、授業のねらいとして示した「どこから見ても格好のよい」と子どもの「かっこいい」には、思いとして大きな違いがあったようである。「格好のよい」とは、高さがありつつも安定した形であったり、線対称の美しさであったりと考えていた。製作が進むにつれ明らかになったことだが、子どもの「かっこいい」は、かわいい装飾があったり安定性ぬきの形のおもしろさであったようである。「格好のよい」と「かっこいい」の言葉の吟味が必要であった。これは授業後の大きな反省の一つである。



ぼくの土台はきょうりゅうのあしなんだよ

### ③ 粘土の扱い方やつくり方の共有化を図り自分なりの表現の広がりを促す

- 部分を丁寧に形よくつくっている
- 全体に安定があり 丈夫な粘土の付け方ができている

製作が進み、土台としたものの上にもいろいろな形のものが加わりだした。出来上がっていく形

授業の実際 (2/3)

- 相互鑑賞し 感じたことや分かったことを話し合う
  - (友だちの名前を挙げながら)
  - ・ハートの形のかざりがいい
  - ・下の方がトンネルみたいだった
  - ・足が恐竜みたいな足だった
  - この飾りのとても細かくていいねいだねえ
  - このタワーなら地震が起きて大丈夫だね
- 製作上の問題点について 解決策を考える
  - 「高くなってきたら倒れそうなんけど」
  - ・太くしたらいい
  - ・下の支えているところを広く(太く)したら
  - 割り箸を軸にしたり支えにしてもいいよ
  - 太くする方法と支える方法が見つかりましたさあ どんどんつけたして完成させよう

を楽しみながら取り組んでいた。その一方では、つくり方が単調になっていたり、掌の熱で粘土の表面がひび割れだしたり、作品の高さや重みで安定を失ってきたりして苦勞しはじめる子も見えてきた。

そこで、材料の扱い方やつくり方の共有化を図るために、製作の途中で鑑賞の場を設けた。グループごとに席を離れて両隣の作品だけでなくクラス全員の作品を見て回るように指示した。製作中の友だちに声をかけ、感想を述べたり、つくり方を尋ねたり逆にアドバイスしたりという交流が見られた。この日の終わりに書いた学習カードに“～さんのこんなところが「おーっ!」「すごーい!」「すてき」だったよ!”の項目から、タワーの脚を恐竜の脚に似せてつくった子、星形の飾りをつけた



わりばしをいれたから大丈夫だよ

た子、4本柱の上に屋根状の板をつけた構造のものをつくった子、とにかく高いタワーをつくった子に注目が集まっていたことが分かる。

また子どもの気づきだけでは不十分と考え、補足する意味で、あまり高さはないが、飾りの部分がとても丁寧につくられている作品、どっしりとして安定感のある作品を取り上げて紹介した。

また、鑑賞で得られたことを述べることに引き続いて、製作上の問題点はないか尋ねた。「粘土が足りそうにない」「高くなってきたら倒れそう」の2つが問題点として出てきた。粘土が足りない子には、粘土が余りそうな子からもらったり、教師の予備の粘土をまわしたりすることになったが、倒れそうな子には、他の子から「(タワーそのものを)太くすればいい」「下の支えているところ(土台)を広く(太く)したらどうだろう」という助言があったし、教師からも「割り箸を軸にしたり支えに使ったりしてもいいよ」というアドバイスを与えた。

表し方のことやつくり方のことで行きづまっていた子には、新たな指針が得られる機会になったと考えている。子どもの製作の様子からも表現に広がりが出てきたことがわかる。学習カードの“今日のふり返り(表2)”でも自身の活動に高い自己評価を与えている子が多かった。

観 点	◎	○	△
しっかりとした土台をつくることができましたか	26	6	0
ねん土をしっかりとつけることができましたか	21	8	3
タワーをしっかりと立てるくふうはできましたか	21	8	3
どこから見てもかっこうのいいタワーになるようにつくることができましたか	21	8	3

表2 学習カードより「今日をふり返って」 3年2組 32名

④ 自分らしい表現のよさや自身の変容の自覚を促す

それぞれの主題を視点に互いの作品を見合い よさや美しさを味わっている

授業の実際 (2/3)

- 今日の活動をふりかえる
  - (友だちの名前を挙げながら)
  - ・ハートの形のかざりがいい
  - ・下の方がトンネルみたいだった
  - ・ものすごく高いけど倒れそう

製作を終え、後片づけの前に感想を述べたり学習カードに記入したりする時間をとった。感想では「思ったより大変だった」というのがほとんどの子の思いであった。どのようなところが大変だったのかという問いに「くずれそうになってしまう」と作品の安

●カードで今日のふり返りをしましょう  
(表2)

定性をあげる子が多く、次に「粘土がべちゃべちゃしていたところ」「粘土が乾いてひびわれしてくる」など土粘土の特徴についてあげた子が多かった。次週に

乾燥後の作品に名前をつけ鑑賞会（子どもには展覧会と言った）を行うことを伝えると「それまでちゃんと立っているかなあ」と不安がる子もいたが、大半の子は固まった後の粘土の姿に興味を示していた。

	全体の形や大きさのことから	部分の飾り付けや模様のことから
作品名	びっくりタワー ロケットタワー 8本の土台のデビルタワー ふにゃふにゃタワー（巻き付けるようにしてつくった） 家タワー（途中に空洞があるから） トンネルタワー すべりタワー（坂道があるから） さんかくタワー	おばけタワー きょうりゅうタワー ゆきゆきタワー（雪だるまがのっている） カラスタワー ドラゴンタワー まほうのフラワータワー スタータワー くるくるまきタワー しましまタワー

表3 鑑賞会で子どもが考えた作品名（抜粋）

翌週の鑑賞会では、硬く固まった様子、色が変化した様子、部品が取れていたりひびが大きくなっていたりしたことなどの子も驚きの声をあげていた。学習カードに“作品名（表3）”を考えて書き、作品のそばに添えて相互に鑑賞を行った。

観賞後の話し合いでは、まず予想以上に硬くなった粘土の触感についての感想が多くあげられた。また、貼り付けた飾りの部品がとれていたことについては、油粘土と違ってしっかりつけること、場合によってはどべを使ってつけることを次の土粘土を使うときの課題として確認した。とれてしまった部品については、合成ゴム系接着剤で補修できることも知らせた。

友だちの作品については、よさや美しさのことだけでなく作品と作品名に込めた友だちの気持ちに触れて話す子がいたり、自分の作品と友だちの作品の違いについて話す子もいたりして、その都度取り上げて「すてきなものの見方だね」と評価した。

思いを形にしていくことに楽しさを感じている

鑑賞会での学習カードには、作品名のほかに表4の“自分のオリジナルなところ”（※注 自分だけの表し方やつくり方）や下の表5の各観点にあるようなふりかえりを行った。“オリジナルなところ”に未記入の子はなく、皆が自分らしさの表し方やつくり方で製作していたことが分かる。また“ふり返り”では、製作後に部分がとれたり、タワーが倒れたりしてしまった子（△の9人）がいたが9人とも“楽しくつくることができましたか”では◎をつけている。作品の完成度より製作活動そのものに楽しさを感じていると考えられる。

製作中には、手の汚れを気にしていたような子どもが完成した作品に満足したり、硬化後の作品に驚いたりしていた。この様子からも、これまでの粘土遊びから粘土でつくることがの楽しさを知った子どもの変容ぶりを見取ることができた。

きょうりゅうのような形にしたよ  
上の方をロケットみたいにした  
下は中があいてるようにした  
トンネルをつけたところ  
ドーナツ形にしたこと  
ぐるぐるにまいたところ  
てっぺんにお花のかざりがあるところ  
へびをつくるように細くしてまわりにまいたこと

今後、粘土の特徴を生かしてつくる題材としては、第4表4 自分のオリジナルなところ（抜粋）

観 点	◎	○	△
こわれずにしっかりと立っていましたか	14	9	9
自分の思ったとおりにつくることができましたか	22	10	9
楽しくつくることができましたか	30	2	2

表5 鑑賞会でのふりかえりより

学年で『ダンス！グルルチュダンス！』。そして、つなぎ合わせてつくる立体的な形での題材として2学期の『こつこつつくろう ホ

ワイトとう』に子どもは出会うが、本題材での学びを生かして次の「造形との新しいかかわりをつくっていく」ことを願っている。